

現代イタリアの市民運動

宇田川妙子

総合研究大学院大学助教授地域文化学専攻／国立民族学博物館助教授

今日、急激にグローバル化という地球規模の均質化・画一化が進みつつある一方で、民族・宗教・性差などをめぐって多様化・差異化の動きも強まっていることはよく知られている。とくに「マイノリティ」として位置付けられてきた人々が自らの承認を求める声は、たとえば先住民運動、民族運動、女性運動、市民運動などという形で、非常に大きな力をもつようになってきた。しかし、その動きはしばしばさらなる葛藤や闘争につながってしまうがゆえに、いまや、いかに多様な差異が相互に承認しあいながら共存しうるかが緊急の課題となっている。近年、多文化主義、多元的共生、公共性、市民社会などという言葉が脚光を浴びているのもそのためである。

さて、こうした現状に対しては、すでに社会学や政治学等によってさまざまな考察や議論が積み重ねられてきた。ゆえに、民族問題や先住民問題などをのぞけば、文化人類学の出番は、それほどないようにも見える。現代社会は、そもそも「第三世界」にかんする学問である文化人類学の研究対象ではないという見方もある。しかし、本当にそうなのだろうか。ここで、文化人類学のフィールドとしてはまだ珍しいかもしれないイタリアの事例を用いて具体的に考えてみることにしよう。

社会運動が活発化するイタリアで

近年イタリアでは、社会運動が急激に盛んになってきている。もちろん同様の動きは、少なくとも他のヨーロッパ諸国でもうかがえるが、イタリアでの隆盛ぶ

りには目を見張るものがある。

たとえば、私がたまたま滞伊していた2003年10月の1カ月間に限って、全国規模で行われたデモや集会を思いつくままに羅列してみても、3日、ローマで開催された欧州首脳会議に対する反グローバル運動の3万人のデモ、4日、年金制度改革反対や社会正義を掲げた労働組合によるローマでの25万人デモ、12日、とくにイラク情勢をうけて戦争反対を訴えた30万人のペルージャ・アッシジ平和行進、24日、年金制度改革反対ゼネストとともに全国各地で行われた150万人の集会やデモ等があった。また、イタリアでは最近、政治的なものから娯楽やボラン

ティア活動を目的とするものまで、さまざまなアソシエーション作りが活性化しており、ボランティア組織に関しては、1997年から2002年の間で全国の組織数が約40%増加したという報告もある。これまでイタリアは、社会的なまとまりや公共精神に欠け、各自が自分の利益のためにしか動かない社会であると言われてきたが、少なくとも近年は、大きく市民社会への道を歩み出しつつあるように見えるのである。

ところで、こうした変化の背景については、既述のように主に政治学や社会学の分野ですでにさまざまな考察が試みられている。たとえば、グローバル化やヨ

仕事中に広場におりてきて話し込む男たち





広場の前に置かれた
抗議文付きの車

ヨーロッパ統合にともなう国家体制の相対的な弱体化、従来の政党政治の機能不全や政治不信の高まり、価値観の多様化、市民活動一般に対する社会的な認知にともなう法整備や行政支援、そして、インターネットの普及をはじめとする高度情報化などである。また、これらが他の現代社会にも共通に見られる要因であるとするならば、実はイタリアには、労働組合組織やカトリック世俗信徒組織など、市民共同体的な組織の伝統が以前からあったという指摘もある。なかには、中世の都市住民のあいだで生まれた「コムネ」という自治組織の歴史にまでさかのぼって考察する研究者もいる。これらの歴史的経験が、近年の上述のような諸条件に触発されて、イタリア社会に急激な社会運動やアソシエーション・ブームをもたらしているという見解である。

以上の考察は、たしかにどれも考慮に値する。しかし、それだけではまだ不十分であることは、たとえば、同じ現代社会の一つとして共通の社会変化を経験しているはずの日本社会に、類似の組織や制度を導入したとしても同じ結果は得られないことを考えれば、容易に想像がつかろう。そもそも、これまでの研究では、いっそう複雑化しつつある現代社会の諸問題を、主に制度や組織の側面から考察してきた。もちろんそれは、葛藤や紛争の早期解決と新たな社会秩序の創成のためでもあった。しかし、だからこそ、そうした問題が、たんに制度や組織の次元のみならず、人々の日常的な実践とど

のような関わりをもっているのかという、より微視的な視点を取り込んだ考察も必要となってくるだろう。そしてイタリアにかんしても、その観点からもう一度振り返ってみると、以上のような社会運動の活性化現象は、彼らが常日頃から広場や路地などの戸外で繰り広げている社交生活と密接に関係していることが浮かび上がってくるのである。

日常生活を微視的にみるということ

イタリア人は、よく知られているように、暇さえあれば戸外に出て過ごすのが好きな人たちである。とくに町の中心にある広場には、夕方ともなると、男性たちが集まってお喋りに花を咲かせているし、女性たちも、路地で頻繁に井戸端会議を開いている。

こうした戸外での生活は、これまでも情報交換の場や縁故などのインフォーマルな関係が醸成される場として注目さ

れてきた。しかし、そのことも含めて、彼らの戸外での最大関心事とは、いかに自分をよく見せて、いかに自分の評判を上げるか、にあると言うこともできる。ここではその様子を詳述する余裕はないが、たとえばイタリア人のファッションセンスのよさもこのことと無関係ではない。もちろん、こうした自己主張や自己宣伝は、彼らの公共性の欠如を裏付けているだけのようにも見える。しかしそれは、裏を返せば、戸外が、誰もが皆の面前で自己を主張し発言しうる場であることを意味しており、その意味では、戸外をまさに公共的な場と見なすこともできる。

また、各自の評判は、その動員力によって最も明確に判断しうるため、彼らは戸外で友人作り・組織作りに励むことにもなる。実際、戸外では、政治的な運動から祭りや旅行の企画まで、さまざまな企画がさまざまな人々によって頻繁に提案され、多くの人を巻き込み、実行に移されている。イタリアでは、多様な意見の表明や組織化という、現在では公共的・市民的とも言えるような行動様式が、戸外生活という形で日常生活の中にすでに組み込まれているのである。

さて、とするならば、近年のイタリア社会の現状(さらには彼らの市民共同体の伝統)も、こうした日常的な公共性との関わりから再考していく必要が出てくるに違いない。しかもそれは、今なぜイタリアで社会運動が盛んになっているのか、という問いにかんしてだけではない。彼らの社会運動は、非常に活気がある一方で、



教会前の広場に集まり、
おしゃべりに花を咲かせる人たち

持続性に乏しく安定的な組織化に移行しにくいという傾向があるが、そのことも、そもそも彼らの日常的な公共性が、既述のように社会全体の合意よりも各自の意見表明に力点が置かれていることと関係があると考えられる。そしてここからは、公共性のあり方そのものも、実はそれぞれの社会に即して多様であることが顕わになってくる。

視点としての文化人類学

以上の考察はいまだ途上である。しかしながら、この事例に限らず、一見、現代社会特有の問題のように見える現象も、単なる社会変化や制度組織の問題ではなく、彼らの日常に根ざしたものであり、そうした微視的な視点が、急激に変化しつつある現代社会の分析に必須であ

ることはもはや明らかだろう。そしてそのとき、これまでもフィールドワークという手法を通して人々の具体的な実践の現場に注目してきた文化人類学が、非常に有効な視点として浮かび上がってくるのである。文化人類学の特徴は、けっしてその研究対象にあるのではない。それを視点という側面から評価しなおして現代社会の研究にも積極的に導入していくことは、現代社会研究のあり方を大きく変革する可能性を秘めている。その微視的な手法は、一見、些末で迂遠に見えるかもしれないが、冒頭でも述べたような多元的共生社会への道を真摯に探っていくためには、むしろ不可欠となっていくはずである。そしてこの試みは、文化人類学にとっても、確実に新たな地平を開くことになるだろう。



宇田川 妙子 (うだがわ・たえこ)
イタリアをフィールドとしながら、家族、女性、ジェンダー／セクシュアリティに関する文化人類学的な研究に取り組んでいるが、その過程で、フェミニズムなどの運動が社会に与えた影響の大きさに刺激を受けて、最近、運動と社会の再編という問題にも関心を持つようになった。研究や学問も、それがいかなるものであれ、社会の再編と無縁ではなく、その意味では一種の「運動」であると考えている。

インドのメディアと宗教文化

三尾 稔

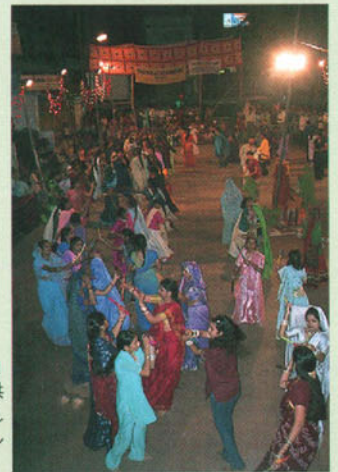
国立民族学博物館助教授

1991年の経済自由化から経済発展が進むインドでは、電気メディアの普及も急速である。携帯電話はいまや都市生活の必需品となり、農村でも別に珍しいものではない。テレビは毎年数百万台規模で新規購入され、衛星放送や有線放送によって40チャンネル以上の番組が24時間視聴されている。ビデオ、ビデオCD、DVDなども、とくに中国製のプレーヤーが商店にあふれ、さまざまな言語のソフトが安価に売られている。インターネットの日常生活への浸透も急で、ちょっとした田舎の町でもサイバー・カフェを見かけるようになってきた。

このような電気メディアの普及によって、インドの日常生活に先進諸国の大衆文化が大量に流入してきている。実際、欧米系ポップ音楽番組であるミュージックTVや日本やイギリスでも有名な一攫千金のクイズ番組（日本では『クイズ・ミリオネア』の番組名で知られている）がインドでも大変な人気を博しているのを見れば、メディアを介した大衆文化のグローバル化がインドにも確かに及んでいると結論づけたい。

しかし、目をたとえばインドの宗教文化に転ずると、その変化は単純ではないことがわかってくる。宗教文化が電気メディアの影響を受けていないというのではない。宗教叙事詩がテレビドラマ化され90% (!) に迫る視聴率をあげたり、さまざまな教団がホームページ上で教祖や聖者を拝礼できるようにしたり、宗教歌がカセットやCDの売り上げの相当のシェアを占めるなど、新しいメディア技術はインドの宗教文化をむしろ活性化している。テレビや映画で伝え

テレビや映画の影響を受け、ファッション的なダンスコンテストが伝統的な供犠祭に取ってかわるような現象も見られる。インド・ラジャスタン州ウダイプルウダイプルのガルバダンス。



られた見栄えのよい大都市の祭礼が、田舎町の若者たちを魅了し、見よう見まねで新しい祭礼が始められ、突然人気を集めるという現象も起こっている。

電気メディアに乗った宗教文化は、しかし人々の信仰のかたちを画一化する働きばかりをするのではない。田舎町の新しい祭礼の場合、モデルは大都市のものであっても、祭礼のプロセスにはその土地の古くからの伝統が接ぎ木され、まったくオリジナルな祭礼が誕生している。さらにそれはケーブルテレビやビデオを通じて近隣の祭礼に影響を与え、祭礼の多様化をダイナミックに促していく。メディアは文化の多様化の媒体としても作用するのである。

電気メディアのもたらす画一化と多様化がインドの宗教文化に今後どのようなダイナミズムをもたらすのか、とくに都市祭礼の変容や聖者信仰の活性化に注目しながらフィールドワークを続けている。